



美瑛の丘の写真展

玉井久貴

昭和49年卒



昭和49年卒業後歯科補綴学第一講座に入局，大学院，講師を経て昭和57年卒業生の歯科医師国家試験，歯科補綴学実技試験の補助員を務め5月に退職。その後川崎市で歯科医業にあたる（1982～2016）。日本補綴歯科学会西関東支部理事等を務め現在横浜市在住。



① 移住体験住宅 ② 移住体験時

北海道の真ん中，上川郡美瑛町を中心に隣接する旭川市の一部と空知郡上富良野町にかけて，我が国にはまれなヨーロッパの田園風景を思わせるような丘陵地帯が大雪山，十勝岳連峰の西麓に広がっています。この地域は標高200～400メートルほどで畑作と酪農が中心です。

私がこの地域の撮影を始めたのは2003年ですので20年を超えました。仕事の合間に四季を通して90回程訪れました。あらかじめ日程を決めているので天候不良等で撮影がうまくできないことは何度もありました。

2021年には美瑛町役場の移住体験事業により，7月～9月の3カ月間美瑛町で暮らしてきました。移住体験住宅は落葉松で建てられており周囲は畑です。時々堆肥の臭いが流れてきますが農家の方々とも会話ができ，窓からは十勝岳連峰を望むことができ，夜は満天の星空で私にとって最高の3カ月間でした。この3カ月間も1回と



して数えていますのでトータル1年半以上美瑛町で過ごしたのかもしれない（①②）。

私が美瑛町を知るきっかけになったのは1997年に横浜の百貨店で開催された写真家前田真三氏（1922～1998）の写真展『北の大地』です。作品の素晴らしさに感銘したと同時に「ここは一体何処の風景なのだろうか」と頭をよぎり美瑛町という地域を知ることができました。当初，前田真三氏の写真集でしか見たことがなかった美瑛町を初めて訪れた時の感動はひとしおでした。

緩やかな曲線が幾重にも重なる絵画調の丘の風景は農家の方々の営みで演出されています。火山灰地であるがため作物の連作をさけることから，毎年その姿を変えパッチワーク状の美しさを呈し，大雪山や十勝岳連峰とも相まって訪れる人々を魅了します。美瑛



3



4



5

3 2024年11月7日～13日まで四谷の日本写真会館5Fのポートレートギャラリーで写真展を開催します 4 美瑛町観光協会主催の丘のまちフォトコンテストでグランプリ受賞 5 現在の使用カメラ

町の広さは東京23区とほぼ同じです。

2003年に前田真三氏の写真集にある赤い屋根の小屋を目の前にして撮影した時、この丘の風景を自分なりの感性で切り取りいつか写真展をとという気持ちが湧いてきました。

この度、東京四谷の日本写真会館5Fのポートレートギャラリーで11月7日～13日まで写真展(個展)を開催することになりましたが、実に最初の1枚から20年を超える年月を要しました(3)。

その間2012年には美瑛町観光協会主催の丘のまちフォトコンテストでグランプリを受賞しました(4)。

私が写真に興味を示したのは父の影響です。小学1年の頃、当時はモノクロームフィルムの時代ですが父が会社の同僚の方々と我が家でフィルムの現像、引き伸ばし、焼付、定着、乾燥などを行っている工程をじっと見ていました。現像液、定着液を作る作業もやらせてもらい、それが写真に興味をもった始まりです。

高校生の時は航空機に興味があったので羽田の埋め立て地でアサヒペンタックスを用い撮影しました。埋め立て地は現在の京浜島

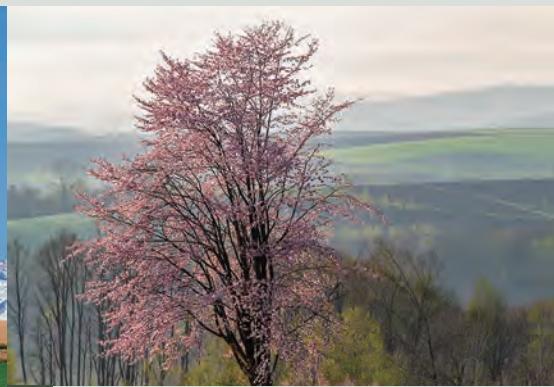
とされますが当時は瓦礫の山でした。大学時代はニコンFを用いリバーサルフィルムを使用して風景写真を撮るようになりました。昭和49年卒業後溝上隆男教授の歯科補綴学第一講座に入局しました。その頃の写真撮影といえどもっぱら症例写真です。溝上先生も教授に就任なさってからまだ半年しか経過してない時です。症例写真を綺麗に撮るためにリバーサルフィルム、ストロボ、レンズの選択、それが終わるとレンズの絞りやシャッタースピードの決定等で四苦八苦、良い思い出になりました。私は大学院生でしたので溝上教授との診療が多く、症例写真も5,000枚を超えたと思います。

今まで多くの撮影機材を使ってきました。フィルムカメラはニコンF、F2、ハッセルブラッドです。これらはすべてマニュアル撮影カメラです。デジタルカメラは画素数等が改善されると何度か替えてきました。現在はニコンD850を2台使用しています。レンズはニコン製を5本所有していますが美瑛の丘の撮影は24-120mmと80-400mmのズームレンズを2台のカメラそれぞれに付けて目的に合わせて使い分けています。外でレンズ交換すると撮影素

子に埃が付着して影として映り込んでしまいますのでその対策としても2台使用しています(5)。三脚はぶれ防止の機材ですが私の場合はファインダー内で四隅を確認し構図を決定するためにも使用しています。また同じ構図でフォーカス・ポイントを変えて撮影する場合にも三脚が必要です。構図が決まったらシャッターを切ります。カメラの揺れ防止のためシャッターボタンは指では押さずリリースを使用します。低速シャッターの時は特にそうです。ファインダーにプリズムを使用している一眼レフカメラの場合はミラーの動きでカメラが揺れてしまうこともあるのでミラーアップしてからシャッターを切ります。

撮影した画像は直ぐにはプリンターでプリントできません。私はRAWという記録形式で撮影します。RAWはカメラ内部で画像処理を行わないのでデータを一度PCに取り込み画像ファイルへの変換処理をします。これを「RAW現像処理」と言います。RAWデータは一般的なコンパクトデジタルカメラが使用しているJPEGよりも情報量が多く高品位な写真に仕上げることが可能です。

次にプリントですがRAWのま



6 丘の春

まではプリントはできないので画像編集ソフトを使用して画像を完成させTIFFというファイル形式に変換して書き出します。TIFFは画像に関する情報を多く保存できるので細部にわたり色の表現が可能です。編集ソフトはAdobeのPhotoshop, Lightroom Classic, NikonのNX Studioを使用しています。撮影した画像を現像・編集しインクジェットプリンターでプリントしますが、モニター画面とプリントのカラーマッチングをする必要があります。カラーマッチングを行うにはまずプリントの色を正しく見る必要があります。部屋の照明は色温度5000K, 演色評価数

90以上のLED照明にします。モニターはカラーマネージメントモニターを使用します。そして画像を現像・編集・確認するソフトの機能を使ってプリントします。1枚の写真を仕上げるのにかなりの時間がかかります。

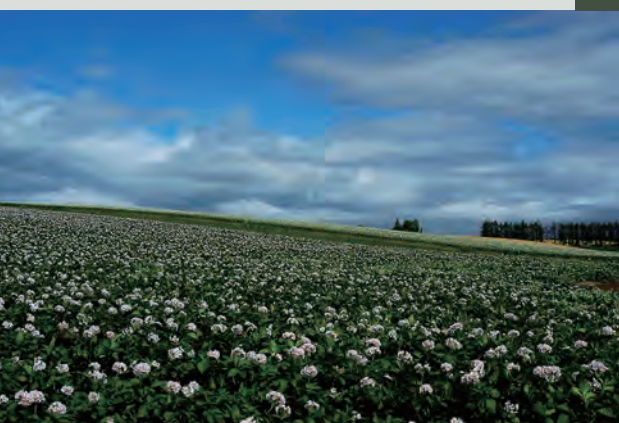
この度の写真展はA2サイズ28点, B1サイズ4点の32点の展示になります。A2サイズは自宅でプリント, B1サイズはエプソンのラボを使用して大型プリンターでプリントしました。写真用紙は絹を含有したファインアート紙を使用しています。ファインアート

紙でのプリントはやや難しいですが印刷面に小さな凹凸があり無反射なので立体感のある作品に仕上がります。

展示は美瑛の丘の雪どけの頃から順次季節を巡る小さな旅をイメージしています。美瑛町の丘は十勝岳の大規模噴火による堆積物が、多くの河川に長い年月をかけて浸食され波状丘陵となったものです。

丘の春は融雪剤の散布から始まり、まず秋まき麦や牧草の緑が顔を出します。雪に埋もれていた土は固く引き締まっているので丘に

7 丘の夏





8 丘の秋

連峰を薄いピンク色に染め、やがて静寂の世界に入ります (9)。

は一斉にトラクターが出て土を掘り起こし作付けの準備をします。丘の土は火山灰質なので乾燥すると薄茶色を呈しています。薄茶色の大地は朝夕の光に染まり様々な色に変化し、さらにエゾヤマザクラの開花が丘に彩りをそえます (6)。

丘の夏はどこまでも続くジャガイモの花、緑色から黄金色へと変化した小麦、茶褐色になる麦秋、麦稈ロール、緑色のビート、丘の彼方には十勝岳連峰、これらと真っ白な夏雲との共演が見事です (7)。

丘の秋はあちらこちらで収穫作業が始まります。十勝岳連峰は薄っすら雪化粧し、木々の紅葉、黄葉、

秋蒔き麦の緑が丘を包みます。大気が澄みわたり、寒暖差で出現する朝霧が幻想の世界を見せてくれます。初雪も降ります。そして落葉松の黄金色の黄葉を最後にやがて季節は冬へと向かいます (8)。

冬の丘はすべてが白い雪に覆われ、時には雪が猛威をふるうこともあります。気温が低い朝には木々には霧氷の輝きがあり、朝夕の光と影は白い雪原を様々な色に染めます。沈みゆく夕日は十勝岳

写真展は未発表作品の展示ですのでこの紙上に展示作品を掲載できないのが残念です。2003年に美瑛の丘で最初にシャッターを切ってから写真展開催まで20年を少し超えました。この間、素晴らしい丘の風景を演出してくださった農家の皆さんに感謝し、いつも温かく迎えてくださった美瑛町の皆さんに感謝し、日本の何処にもないこの美しい丘の風景がいつまでも続くことを願っています。

9 丘の冬

